

第20章 阿波原種農場における業績

(昭和24年～昭和44年)

第1節 業務の変遷

第2次大戦の終戦直後は逼迫した食糧不足を解消するため、関係機関あげての増産運動が展開された。阿波原種農場(当初は久勝原種圃場)はこのような、昭和24年に食糧増産の基本となる稲麦の原種生産を目的として阿波郡久勝村に設置された。昭和32年に阿波原種農場となり、同44年に場の機構改革で農場が廃止されるまでの20年間、その事業が続けられた。圃場面積は約90aで水稲、裸麦、小麦の原種栽培が行われたが、昭和32年にナタネ、昭和35～36年には陸稲も一部採種された。生産状況は業績の項に示すとおり、年次差はあるが、本県の奨励品種の殆んどが栽培され、昭和25～32年では稲、麦ともに15～20石、33年以降は水稲で2,000～2,500kg、麦類は1,500～2,000kgの原種を生産し県下に配布した。

原種の生産は、富岡分場(水稲、麦類)、池田分

場(陸稲、麦類)、本場(主として原々種)でも生産されたが、阿波郡は本県でも特に良質な米麦の主産地であり、優良種子としてその評価が高く、新品種の早期普及と種子更新に大きく貢献した。

また阿波原種農場は地元農家と密接な関係があり、こうした原種生産のほかに品種を中心とした各種の試験も実施された。水稲および麦類の品種比較試験は開設以来継続(昭和25～43年)実施され、本県の高収地帯を対象とする奨励品種選定の貴重な資料を作成した。その他の品種試験では水稲の早植栽培、直播栽培があり、さらに大豆、ナタネなどの品種も検討されている。栽培試験では水稲の並木植、培土栽培、節水栽培、開田不稔、除草剤、麦作では、播種期、施肥法、除草剤などに関する試験が数多く精力的に実施された。

第2節 研究業績

1. 原種配布

産を行い、県下に配布した。年次別の配布数量は第1表のとおりである。

主として水稲、裸麦、小麦を中心に、原種の生

第1表 原種配布数量

年度	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
水稲	1080	17.07	15.12	25.17	20.43	20.76	15.48	1715	1760	1356	1164	1418	1140	1749	2490	2540	2720	2490
裸麦	760	6.32	11.80	11.48	8.30	19.17	16.46	1225	2060	1449	864	665	0	501	1840	1060	660	1040
小麦	088	3.60	3.84	4.37	3.45	1.80	3.29	193	180	243	648	843	100	508	960	970	660	1060
陸稲	—	—	—	—	—	—	—	—	—	44	29	—	—	—	—	—	—	—
なたね	—	—	—	—	—	—	16(ℓ)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ビール麦	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	190

※雨被害のため採種できず。昭和40～42年は生産数量

2. 試験研究

(1) 稲

① 品 種

本場における奨励品種決定試験に準じて有望品種の生育、収量等を比較し、県西地帯に適する、奨励品種決定の資料とするために、昭和26年から43年まで実施し、第2表のとおり有望品種を選定した。

第2表
水稻の奨励品種決定試験における主な有望品種

時 期	主 な 有 望 品 種
昭和26～32年	東山65号(サチワタリ)、シモツキ、ミホニシキ
昭和33～37年	中国6号(キビヨシ)、ナギホ、セトホナミ、中国9号(ヤマトミ)
昭和38～43年	中国15号(タチカラ)、ヤシロモチ、コトミノリ

早植栽培に適應性のある品種を選定するために、昭和36年に10品種を6月5日に移植して比較した結果、トヨサト、ナギホ、マンリョウが優れていた。乾田直播栽培に適應する品種を見出すために、昭和36、37年および40年に、のべ30品種を試した結果、ナギホ、トヨサト、サチワタリ、南海25号、クサナギ、東海22号などが、良質多収であった。

② 栽 培 法

a. 育苗、および栽植様式：昭和34年に、早期栽培における播種期と畑苗代のビニール除覆適期を知るために農林17号を3月21日、4月1日、4月11日に播種し無保温と除覆期を発芽揃い、2葉期、3葉期の3回として比較した。その結果、無保温、早期除覆区は雀害多く、また3月21日と4月1日の播種では、出穂期が1～2日しか差がなかったため、7月中旬出穂を目標とするとき、4月1日播種の第3葉期除覆が適期と考えられた。

栽植様式については、昭和25～26年に秋落ち対策としての並木植の効果をみている。正方植と並木植を、栽植密度を変えて検討したところ、いずれの場合も並木植が多収で秋落ち対策として有効であることを認めた。

b. 本田の肥培管理：培土効果に関する試験が

昭和27年と30年に実施され、培土効果が高くその時期は、7月21日ごろ(有効分けつ終期)が適期であった。また、培土効果と穂肥効果を比較したところ、精穀歩合は培土によって低下し、穂肥によって高くなったことから培土と穂肥効果は異なるものであるとしている。

昭和29、30年には、桑園やサツマイモ畑を水田に転換した圃場においてしばしば稲の不稔が発生し、その原因究明と対策のために、聞きとり調査と現地試験を行った。その結果、新開田においては7月中旬から根腐れが多くなることがわかり、幼穂形成期前10～15日の断水による不稔防止効果高く、また石灰、無硫酸根肥料、ボーキサイト区も不稔が少ない傾向にあることが認められた。

また、県西地帯は降雨量が少なくかつ漏水田の多いことから節水栽培が必要とされ、その指標を作るための試験が昭和33、34年に実施され、活着後、断水区(雨水も早期落水)は、常時湛水区に比べ91%の収量にとどまったが、葉が萎凋しない程度の節水区では収量に差がないことが確認された。

c. 栽培様式：乾田直播栽培に関する試験が昭和36年に播種方法について昭和37年に施肥法について実施され、播種法については、条播が点播よりもすぐれ、施肥法については、穂肥重点区において、多収という結果を得た。

d. 除草剤：昭和36年に、PCPの施用試験が行われ、第1回中耕後散布が最も除草効果が高かった。また、粒剤と水和剤では、薬害の出方はやや異なるものの、除草効果、収量に差はなかった。昭和36、37年にはPCP尿素について検討し、この場合も中耕後もしくは植代後施用が望ましく、移植前全層使用は除草効果が不十分であった。また、昭和38年には新除草剤の適應性試験が行われ、FW-925、A-1114-B、PCP+MCPBが有望であった。昭和39年には乾田直播栽培においてPCP、DCPA、FW-925、2、4-Dを組み合わせて体系化を試みたが、どの組合せも非禾本科雑草に対する防除効果が不十分であった。

(2) 麥

① 品 種

県西地帯に適する奨励品種決定の資料とするた

第20章 阿波原種農場における業績

めに本場の奨励試験に準じて実施し裸麦については、四国裸10号、四国裸11号、キカイハダカを小麦については西海101号を、有望品種として選定し四国裸10号（ユウナギハダカ）は奨励品種に選定された。

② 栽培法

裸麦の品種別播種適期を知るため昭和29年に主要9品種を11月10日、20日、30日に播種して検討した結果、珍好83号は11月30日播種が良く、香川5号、白麦8号は播種が遅くなるほど収量が低下し、その他の品種は20日播種で多収となった。

25年には、熔成リン肥の肥効試験が行われ、他のリン酸肥料に比べ熔成リン肥が優れた肥効を示すことを認めた。また昭和29年には、カリ適量

試験が行われ、カリは反あたり1.5～2.0貫が適量で、それ以上の施用は増施効果がみられないとしている。

除草剤については、昭和30年にCI-IPC、CMUについて検討されCI-IPCは、反あたり100gが適量で、この場合、籾穀覆土の必要はないものと思われた。CMUは50gの処理量においても薬害がはなはだしく使用が困難であった。

(3) その他

大豆、バレイショ、ナタネ、サツマイモ、サトウキビについて品種の比較試験が実施され、第3表のような結果を得た。

第3表 大豆・バレイショ等品種比較試験

作物の種類	試験年度	有望品種	備考
大豆	昭和27、28年	玉錦、伊豆大豆、池田21号	
バレイショ	27 30	北海2号、島系30号 ウンゼン、西海4号	種いも用 春作バレイショ
ナタネ	27	農林14、21号	
カンシヨ	27	中国5号	飼料用
サトウキビ	28	CP29-116	多収であるが糖度低く普及性なし、